

真の省エネ住宅 エンドユーザーへの伝え方

清水 雅彦

第2回 「家の寒さは危険」を伝える

しみず まさひこ
船津地産株式会社 取締役建築部長 一級建築士・省エネ建築診断士・CASBEE 戸建評価員
初回接客から住まいづくり提案を行う「住まいづくりアドバイザー」を担当。様々な切り口から省エネ住宅の価値を伝え、ワンランク上の断熱住宅を多くの方々に採用いただぐ。
大手建材メーカー在籍中には、高気密高断熱住宅の普及啓蒙活動と共に工務店への支援、エンドユーザーへの提案活動を行い、省エネ住宅の経験は20年を超える。

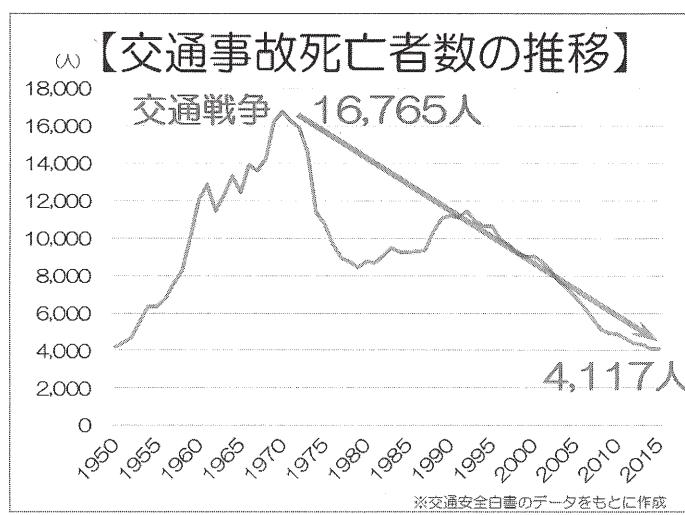


「昨年の交通事故死者数は4117人でした。さて過去に最も多い交通事故死者数は一年間で何人だったでしょう?」
三掲で「昨年の約2倍の83266人」「約3倍の1万2627人」「約4倍の1万6765人」…8割くらいの方は「約3倍の1万2627人」と答えられます。正解は、1万6765人で一日あたりに換算すると46人。まず、この数字に皆さん警かれています。

そこで、お客様が自分で連想しやすい身近な話題からアプローチをし自然な流れで説明していく必要がある。今回は、「交通事故」の話題から「家の寒さが危険」であることを伝える方法をご紹介します。いきなり「家の寒さは危険」と言つても、家の中で凍え死ぬ人は皆無に等しく、エンドユーザーはピンときません。そこで、自分で連想しやすい「交通事故」の話題から話をすすめ、「へえー」「そうなんだあ！」と耳をこちらに傾けてもらいます。

高気密高断熱の省エネ住宅に積極的に取り組んでいて、それなりの知名度のある工務店やハウスメーカーには、高気密高断熱住宅に興味があるお客様が集まっていますので、「真の省エネ住宅を伝えること」はそれほど難しくはありません。

しかし、住宅を購入しようとしている人のほとんどは、初めから「真の省エネ住宅」が欲しいとは思っていません。初期検討段階の方々は、間取り、収納、水回り設備、外観デザイン、日当たりなど目で見て分かりやすいことに興味があり、いきたがり「真の省エネ住宅」の説明をしてしまった耳を持つていただくことが難しいのです。



以降に交通事故死者数は急激に増えて続け、1970年には史上最高の1万6765人の尊い命が奪われてしまいました。この頃は、日清戦争の日本人死者数を上回りそうな勢いで、から「交通戦争」とも言われた時代でした。当時は自動車安全装置も乏しく、なんとシートベルトも装着されていなかつたのです。

その後、自動車メーカーによる全対策、道路整備、交通安全啓蒙活動などによって、約4分の1までに減少させることができたのです。特筆すべきは、自動車保有録台数は当

時より約10倍に増えたのですが、交通事故死者数は4分の1まで減らすことができたことです。

○家中は道路より危険

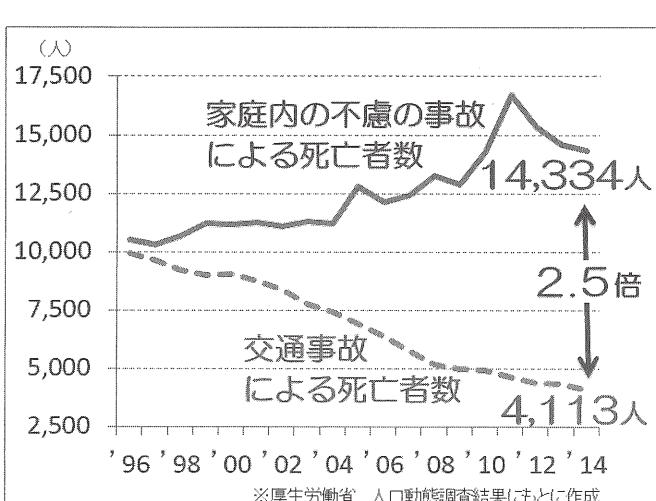
一方、住宅の中で起きる不慮の事故による死亡者数は年々増え続け、交通事故の約2・5倍の方が、不幸にも家中で亡くなっています。実は「道を歩いている」よりも「家で生活している方」が「2・5倍も危険」という理不尽なことになつてゐるのです。

では、家庭ではどのような不慮の

あたりに換算すると47人の尊い命が奪われているのです。もし交通事故で一日に47人の死者が出たら、トップニュースになることでしょう。平成26年の年間熱中症死亡者は52人、先日の熊本地震での死者数が49人ですから、いかに「寒い家が危険」なのかが分かります。

家庭内の不慮の事故？

- 階段から転倒・転落 
- 火災、やけどなど
- 不慮の窒息(喉つまり)
- 浴槽内溺死(できし)
- ガス中毒など 



※厚生労働省 人口動態調査結果に基づいて作成

原因	割合
窒息	37%
溺死	28%
転倒・転落	19%
火災、やけど	7%
ガス中毒など その他	6%

工を切り口に、冬、省エネでLDKや寝室、洗面所、浴室まで家全体が暖かい「真の省エネ住宅」の価値をきちんと説明し、断熱性向上によるコストアップの価値を理解していくだければ採用してもらいうことができまます。国民の生命、健康及び財産の保護を図るために、エネルギー消費量を減らしながら、「日本の家から寒い」を無くし